

- 25) R. B. Heilman, *This Great Stage* (Washington, 1963) p. 160.
- 26) W. Knight, *op. cit.*, p. 153.
- 27) J. D. Wilson, *op. cit.*, p. ix.
- 28) G. K. Hunter (ed.), *Macbeth*. (New Penguin Shakespeare, 1967) p. 144.
- 29) *Ibid.*, p. 14.
- 30) K. Muir (ed.), *op. cit.*, p. 22. の脚注に “Steven says, ‘This intervening portion of time is personified; it is represented as a cool impartial judge;’” とある。

The interim having weighed it, let us speak
Our free hearts each to other.

NOTES

- 1) Wilson Knight, *The Wheel of Fire* (Methuen, 1954) p. 153.
- 2) L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes* (Chatto & Windus, 1966) p. 121.
- 3) Kenneth Muir (ed.), *Macbeth* (The New Arden Shakespeare, Methuen, 1963) p. lix.
- 4) L. C. Knights, *Explorations* (Penguin Books, 1964) p. 32.
- 5) L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes*, p. 121.
- 6) *Ibid.*, p. 142.
- 7) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (Macmillan, Paper 52, 1966) p. 292.
- 8) cf. 柴田稔彦, *Macbeth* (シェイクスピア・ハンドブック, 南雲堂, 1969, p. 421).
- 9) A. C. Bradley, *op. cit.*, p. 292.
- 10) *Ibid.*, p. 292.
- 11) 「自己欺瞞」という観念については T. S. エリット, 福田恒存, J. P. サルトルなどに負う。J. P. サルトル「存在と無」(松浪信三郎訳, 人文書院, 1969) の「自己欺瞞 (mauvaise-foi)」の章及び拙稿「Lear's Dream 或は Folly」(福岡女子大学, 文芸と思想, 第33号) 参照。
- 12) William Empson, 'Dover Wilson on Macbeth' (*The Kenyon Review*, vol. xv, 1952)
- 13) cf. C. S. Lewis, 'Conscience and Conscious', *Studies in Words* (Cambridge, 1961) 及び野島秀勝「近代文学の虚実」(南雲堂, 1970) p. 222, p. 229 等参照。
- 14) cf. E. A. J. Honigman, "The Politics in 'Hamlet' and 'the World of the Play'" (*Stratford-upon-Avon Studies*, 5, Hamlet, Arnold, 1965, p. 132.) に J. E. Hankins の次の言葉が引用してある。
'some attention to these periods *in absentia* is absolutely necessary to an understanding of the scenes actually shown.....'
- 15) William Empson, *op. cit.*, p. 99.
- 16) *Ibid.*, p. 90.
- 17) W. K. Wimsatt (ed.), *Dr. Johnson on Shakespeare* (Penguin Books, 1969) p. 134.
- 18) W. Empson, 'Fool in King Lear', *The Structure of Complex Words*, (Chatto & Windus, 1964, p. 149.)
- 19) cf. L. A. Cormican, 'Medieval Idiom in Shakespeare' (*Scrutiny*, reissued, vol. xvii, p. 312.) しかしマクベス夫人の 'My father as he slept.' 云々からはもっと広い神話的, 父親殺しの archetype が考えられるかも知れない。N. Frye はこの言葉を *Fools of Time* の一章の題名にえらんでいる。
- 20) cf. 福田恒存「マクベス」(福田恒存評論集, 第2巻, 新潮社, 1966).
- 21) A. C. Bradley, *op. cit.*, p. 299.
- 22) *Ibid.*, p. 299.
- 23) T. S. Eliot, 'The Dry Salvages', *Collected Poems*, (Faber & Faber, 1963) p. 208.
- 24) J. D. Wilson (ed.), *Macbeth* (The New Shakespeare, Cambridge, 1951) p. 103.

しかしマクベスはこういうことを自然に信じているわけではない。だからこそ、私が述べて来たような思考の経過をたどったわけである。したがってこの句はあの恐怖をのがれようとするマクベスの不安を表わすところに重点があると思われる。少々野暮な補足をすれば、客観的にみても、ダンカンがこのままでは、自然にそんなに早く死ぬなどとは考えられないし、仮りに何かの‘chance’で死ぬことがあっても、D. ウイルソンのいわゆる‘primogeniture’の勝利²⁷⁾というやつでマルコムが王位につくことは明白であり、その上マクベスには少なくとも今のところバンクオーとちがって子供はいそうにないし、このままでは、マクベスが（あるいはその子孫が）王になるなどということは到底起りそうにもないのである。マクベス夫妻がマルコムとドナルベインがあんなふうには逃げてゆくのを考えに入れていたかどうかは勿論推測の限りではないが（彼等がとどまっていたら彼等も何らかの手段で殺されたであろう、）とにかく、マクベスが王になるためには、ダンカンが死ぬことが第一条件であり、その限りにおいて夫人のいうように、王殺しは一番の近道でもあったのだ。そして王になりたいという野心を捨てぬ限りマクベスの不安と恐怖はなくなりもしないので、だからまた、まだ王を殺してもいいのに、かなりやけになったせりふをすぐ次に吐くのである。

(aside)

Come what come may,
Time and the hour runs through the roughest day.

更にバンクオーの呼びかけでやっと同僚達のいるのに気づき「忘れていたこと (things forgotten) を鈍い頭で思い出さうと懸命だった」と答える。これはブラッドレイなどの指摘をまっまでもなく、マクベスの不自然な下手な嘘であるが、それは恐怖にゆずぶられた後の不安な余韻を残していて、先に引用したダンカンの死体発見の場におけるマクベスのせりふがアイロニカルに彼の本音を裏切り示していたのとほぼ軌を一にした作劇術の小さな応用例であろう。G. K. ハンターの注では「マクベスは過去のことをいっているが、実は彼の考えていることは未来のことだ」²⁸⁾とある。しかしむしろ不安の中に過去から思っ
て来て、戦場で忘れていたことが、今ははっきりと眼前に恐怖として現われ未来を示したという、そういうニュアンスのものと取ることが出来よう。

マクベスは‘rapt’していた自分の内心の秘密を知らない同僚達の、日常的な世界にもどり、落ちつきをとりもどしたかに見える。しかし、彼はすでに彼等とはほとんど別の次元の世界から、G. K. ハンターのいう「社会的義務とか社交上の雑談とかを全くお芝居の‘rigmorole’にかえてしまう一つの夢」の、「今後マクベスを次第に食いあらしめてゆく dream-self」²⁹⁾の世界から、他人を見ているのである。そしてバンクオーはひょっとすると利用出来るかも知れない相手のようにも、また同時に、いつ自分の秘密がその眼にふれるかも知れない他人の代表のようにも思われ、多少の緊張と計算をもって次のような‘cool’³⁰⁾な擬人的表現をまじえて、感情的にはやはりどこか neutral なせりふをマクベスはつかうのである。

に即して考える傾向が強くなるのはよく知られた事実であろう。それはとにかく今重要なのはその **rational** な傾向がマクベスの王殺しの想念、私が上述して来たような彼の自己欺瞞の動機そのものの中にいこんでいる点であって、だからこそマクベスのこの '**aside**' が全体として、一見奇妙な、**fantastic** な、普通の人間の想像力の論理からするとあるゆがみをおび、しかも同時に **rational** であるという論理の構成をもつことになったのである。R. B. ハイルマンはリアの心理に一種の '**calculating tendency**' を認めている²⁵⁾が、「リア」とは主題の異なったこの「マクベス」の主人公の心理、特にこの '**aside**' の中にも、以上のような意味でそれがはっきりと認められるのである。

マクベスは自分でかけた論理のわなに自分でかかり、恐怖にゆすぶられ、その恐怖を再び彼なりの経験的合理主義によってとらえようとして、どうしようもなくなる。まだ殺人の想いは '**fantastical**' なものに過ぎないとつぶやくが、その **fantastic** な恐怖が、メカニカルな自己欺瞞の論理の中で彼の **negative** な意識だけは明析なものにするけれども、彼の倫理的主体の自然な機能は窒息させられ (**smothered**) 遂には自分の考えていることの意味をマクベスは喪失し、ただ、暴力の情念のみをはらんだ **unreal** な未来がW. ナイトのいうように²⁶⁾ **real** なものにとってかわろうとする。それは'殺す'ということが王位を得るための手段であるというリアルな意味をはなれて、それ自体で一つの '**preoccupation**' ひいては '**obsession**' のようなものになったにひとしく、したがってマクベスはこの時真の行動力をも失なったということにもなる。何故なら行動とは、最小限、一時的にでも目的と手段(目と手)の主体的な意味に満ちた、**integral** な統一を必要とするのであり、マクベスの場合倫理的主体が意味を失なってゆく分だけ、恐怖によって意識は明析になるが、単に **negative** に過ぎないその意識は、決して、'**vault**' する情念に方向を与えることが出来ないからである。

以後、彼の野心が燃上るとき彼には目と手の分裂の意識が烈しくなる。

The eye wink at the hand; yet let that be
Which the eye fears, when it is done, to see. (I. iv.)

更にダンカン殺害へ向うときのあのよく知られた 幻影の短剣の シーンについてはあらためて説明を要しまい。

VII

以上が大体冒頭に引用した '**aside**' に関する私の考えであるが、それにすぐ続くくぐりにも少々ふれておくことにしよう。

マクベスはあの恐怖にゆすぶられた後、ふと気づいて次のようにいう。

(aside)
If chance will have me king, why, chance may crown me
Without my stir.

り示す (betray himself) ドラマティック・アイロニーの一例としてよく引用されるものであるが、マクベスにとってそういう恐怖のもつ意味はすでに、今問題にしているこの 'aside' の中にあったのである。バンクオーならば悪夢に悩まされたとき次のように祈ることが出来る。このせりふは美しい。(II. i)

Merciful powers !
Restrain in me the cursed thoughts that nature
Gives way to in repose.

VI

再び 'aside' に戻ろう。マクベスはその想像の恐怖に対処しようとして、警句めいた言葉をつぶやく。

Present fears
Are less than horrible imaginings.

(眼前の恐怖など恐しい想像に比べたらとるに足りない)

この句に対して日本のある注釈書では '有名な一句' とだけコメントしてある。そして人はこの注釈から、この句が何故有名になったのかを考えてみたい気にもさせられる。また、D. ウイルソンは、この句をロス (Ross) のせりふ (96~97行)——ノールウェイ軍の隊列の真只中に斬り込んで奮戦したときのマクベスの姿をえがいた 'Nothing afraid of what thyself didst make, strange images of death.' という行とともにマクベスの 'character clue' として注している。²⁴⁾ 要するにマクベスの性格は勇敢な部将でありながら、'想像上の恐怖には弱い' ということであろう。しかしこの場合もそういう性格論だけでは決して十分ではない。この句はマクベスが今王殺しのイメージを思い浮べてその想像上の恐怖にゆすぶられていることを示していることはコンテクストからいって当然のことであるが、同時にこれはまた、わかり切ったことをいうようだが、fears も imaginings も無冠詞であり、したがってそれらが一般的な意味をおびている以上、この句はマクベスがそれを口にすることによって今自分が感じている恐怖の意味をどうにか限定し、それに対処しようとしているその姿勢をも表現していることになるからである。つまり王を殺すことは恐しい、しかしそれが恐しいのは想像上のことだからであり、いざとなれば大して恐くないのではないかという含意がある。マクベスははこの警句めいた言葉をどこから得て来たか。劇の内容から表面的に考えてみただけでも、それはマクベス自身の性格に対する自己判断と部将としての経験にもとづく一種の合理主義に由来すると取って差しつかえあるまい。この句がこれだけ取り出されて有名になったのも、それが経験的合理主義の特色をもっていて、それが近代人の趣向にかなっているからではないかと思われる。政治の領域ではマキアベリの事実尊重が、また特にベーコンあたりから、人間の心理を考えるのに経験的 fact

そ彼は自分の欲望が良心＝意識の眼をのがれて、 かってない程自由に王殺しという行動に飛び込んでいる姿を見出しているのである。と同時に、 勿論、 その 'aside' の 'whose' 以下が暗に示しているように、 マクベスは身内に 'ambition' が恐しい程の暴力的エネルギーを伴って 'vault' するのを感じず。 いわば野心がその自己欺瞞のメカニズムの中で暴力の 'emblem' と化し、 自己の身体 (my single state of man) さえも危機にまき込みそうな極めて unnatural な自己破壊の予感をはらんでくる。恐怖はこの場合それ自体では、 この自己破壊の予感から生ずる逆説的な防衛本能のごときものと取ることが出来よう。

マクベスは 'rapt' して王殺しのイメージを念頭に浮べ、 'restless ecstasy' の中で恐怖にゆすぶられている。これを単にマクベスは '想像の恐怖に弱い' というふうに自然主義的性格論ですますわけにはいかない。そしてそんなふうに解釈するのがマクベス夫人（時としてマクベス自身）であるからだ。そしていわゆる '性格論者' の代表のごとく今では見なされているブラッドレイが次のようにいうとき、 決してその程度のことを意味しているわけではあるまい。「マクベスは自分自身を了解していない。」²¹⁾あるいは、

彼（マクベス）は……行動原理として、 あの想像的恐怖に具象されている道德律を認めて (accept) いないのである。²²⁾

これは卓見というほかないものであるが、 私流にいいなおせば、 マクベスは恐怖の中に自己破壊を予感しながらも、 しかもその意味をつかむことが出来ないのである。何故なら、 もう何度も繰り返して来たように彼の推論の前提がすでに自己を欺瞞しているからである。ここにこの劇の最も重要なモチーフがあるのではないか。ダンカン殺害の後、 更に次々と暴力と不毛の破壊へのめり込んでいき、 いわば恐怖の「経験は手に入れるが意味は取り逃がし²³⁾」て、 遂に人生そのものが '白痴の語るたわごとであり'、 '無意味な' (signifying nothing), 空虚なものとなってしまう一人の人間のあまりにも無残な姿を映し出して、 '悲劇' とさえ呼んでいいかどうか分からない、 (あるいはシェイクスピア的な意味でやっとな '悲劇' であるような) この劇の最も深い作劇のモチーフが。

そしてマクベスのその恐怖の意味とは、 普通の価値意識を持った人、 例えばバンクオーのような人にとっては全くといっていいくらい自明に思われること。一王ダンカンを殺すことは、 いうまでもなく自己自身のよっている価値の根源を、 つまりマクベスに 'valour's minion' の名声と 'golden opinions' をもたらした彼自身のその忠誠心によって来たる根源を、 またそれがいかに 'conventional' なものに見えようとも、 その忠誠心によって初めて、 '永遠なもの' の Grace—'merciful powers' との結びつきを見出すことも出来たかも知れないマクベス自身の、 その主体的価値の根源を、 容赦なく破壊することに他ならぬのである。これは平凡ないい方かも知れないが、 自己破壊の恐怖ということのメタフィジカルで倫理的な真の意味も結局はそこにあるであろう。例えば、 殺害されたダンカンの姿が明るみに出て、 恐怖と混乱の中に皆が集ってくる場面 (II. iii) で、 マクベスが王の死を悲しむふりをしていうせりふ「こんなことが起るなら、 せめて一時間前に死んでおけばよかった、 ……今この瞬間からこの人生に大切なものはなくなってしまった」 (from this instant there's nothing serious in mortality) は同時にマクベスの本音を恐しい程裏切

This supernatural soliciting
Cannot be ill, cannot be good.

自明なことだが 'cannot be ill', 'cannot be good' の内容は表面的には、前者は次の 'if ill...' 以下、コーダーになったこと、その幸先のよいことを、後者は 'if good...' 以下、王殺しのイメージが浮んだことを夫々さしている。そしてこれまた誰しも気づくことであろうが、マクベスは先ず、価値の点からいって、全く、いや絶対的に比較出来ない二つのことを、恰もそれらが同次元のもの、同じメカニズムの中の出来事でもあるかのように並置していることである。コーダーになったことが事実であるから、したがって王になることも予言どおり確実であろうと仮りに思われても、それが直ちに王殺しのイメージを触発する程の 'soliciting' であるならば、そしてマクベスが普通の倫理感覚の持主（例えばバンクオーのような）でありさえしたら、その 'soliciting' を 'cannot be ill' などといっておれないはずで、全くのところそれは 'cannot be good' 以外の何ものでもないはずである。それをわざわざ価値次元のちがった 'cannot be ill' と並置するのは、明らかにマクベスが予言の後半もあたるであろうと自然に思っているのではなくて、むしろ コーダー→王という成り行きを何か道徳的な価値意識のはいらない、一種 neutral なメカニスティックな必然のごとく見なしたがつている、信じたがつているということではないか。—（それは感覚的には、'fair is foul; foul is fair' に呼応している）—ということは、私が先に述べたように、決して善の色合いをおびることのない自分の王殺しの行為がせめて悪の色合いをうすめられているものとして意識にうつる、そういう必然性、—そしてそれは勿論自己欺瞞のいわばニセの必然性に過ぎないのであるが—の中にそれこそ自ら知らずに位置していることの出来るきっかけなり、'状況' なりをマクベスが求めていた証拠ではないか。しかしここでも次のような疑問をいただく人がまだあるかも知れない。マクベスは魔女の '予言' が自分の道徳的価値意識などを超えた「運命」の必然のごとく、一時的にでも実際に思われたからこそ恐れ悩んでいるのではないのか、と。この問いはブラッドレイ、更に、それをふまえて福田恒存氏²⁰⁾ が鋭く指摘したように、ハムレットにならあてはまるがマクベスにはあてはまらない。若しあてはまるなら、マクベスは神に祈れないまでも、自分の無理な野心などすてて、少なくともハムレットのように根本的な懷疑に勇敢に身をゆだねるべきであり、更に自己の真実のあかしを、それなりに身を切るようなつらさの中に探し求めねばならないであろうから。

したがって、以上のような私の推論が正しいなら、

If good, why do I yield to that suggestion...

にかくされている心理的パラドックスは次のようになる。つまりコーダー→王という成り行きがマクベスにとっていいものであればこそ、（しかも魔女は「殺すな」とはっていない！）そしてそれが無色の機械的必然のごとく一時的にでも思われるように自己を欺いたからこそ、したがって悪に屈しても自分の道徳的責任はまぬがれていると思われたからこそ

のゆがみということになるであろうが、(ちなみに、十八世紀の ジョンソン博士は ‘Lady Macbeth is merely detested’ といっている。¹⁷⁾)しかし、先のエンプソンの言葉を、やや気取ってもじれば、それでもある種の人々が ‘love’ とよぶかも知れないものであり、丁度「リア」のエドマンドが死ぬまぎわの地獄行きの道すがら、‘Yet Edmund was beloved’ (つまりゴネリルとリーガンから)といっていて、エンプソンはそれはやはり非常に ‘striking’ なものだとは別の箇所¹⁸⁾で書いているが、そういう ‘love’ とマクベス夫人の ‘love’ も、悪とのかかわりではシェイクスピアの中ではやや広い意味で同じ部類に属するといっ
てよいであろう。(あるいはこういう場合人は当然アダムとイヴの原罪神話を想起するかも知れない。)¹⁹⁾

V

マクベス自身に向おう。マクベスは自分がやろうとしていることが悪であることを知っている。ここで勿論マクベスの悲劇を「良心の悲劇」などというのは単純に過ぎる。くどいようだが、「良心の悲劇」というのは、簡単にいって ‘good conscience’ にてらして恥しくない、あるいはそれだけの大義があると思ってやったことが、かえって悲劇を生むというパターンでなくてはならぬ。ブルータスはほぼそれに近い。マクベスには大義などありはしない。マクベスにあるのは道徳的次元では一種の ‘guilty conscience’ だけであり、問題はこの積極的価値を生むことのない negative な conscience (または consciousness) がどういうふうに向内しているかにある。王位が欲しい。しかしどこを叩いてもダンカンが暴君であるなどという考えが出てくるはずがない。それにマルコムもいる。マクベスの野心、更に王殺しに少しでも善の色合いをそえるものなどありはしない。始めから悪玉と規定されているリチャードなら ‘coward conscience’ と毒づくことも出来るが、勿論、マクベスはそんな悪玉では決してない。それでも王位が欲しいとなればどういうことになるか。せめて自分の殺しが悪の色合いをうすめられたものとして感じられたらという、つまり殺しがそれ自体では道徳的価値判断のはいってこないような、何か neutral なプロセスとして意識に現前してくれたらという、そういう fallacious な感情の屈折が起るのは、比較的に見やすい理ではなかろうか。マクベスの権力への欲情はこの屈折を利用して、例えばダンカン殺しの後のマクベス自身のせりふ (II. ii) —

To know my deed it were best not know myself.

が暗示しているように、意識がいわばそれとは気づかないふりをしているうちに一挙に自らを成就したがっていたのではないか。そして、マクベスの意識にこの ‘pretending’ (= make-believe) のための最大のきっかけを与えたのはいうまでもなく魔女の ‘予言’ である。‘aside’ についてみよう。

inversion) あるいはその転倒への傾斜のテーマにふれ、マクベス夫人の‘あなたは……野心がないわけではない、しかし当然それに伴ってしかるべき邪な心に欠けている、ひどく欲しがっているながら、あくまできれいごとですませようとなさる’ (I. v.) というせりふをパラフレイズしたあと、次のようにいっている。

The inversion of moral values is sketched as an actual system of belief, and given strength by being tied to the supreme value of courage. Of course it is presented as both wicked and fallacious, but also as a thing that some people feel.¹⁸⁾

これは、私の印象では、この劇の発想の本質、少なくともその一面を実に delicate な心理的 ニュアンスに富んだ言葉づかいで表現したもののように思えるが（もっとも ‘some people feel’ には少々気取りのようなものを感じられるけれども、）それはそれとして、ここで 正常な belief とは、いうまでもなく、キリスト教の ‘Grace’ ——たとえそれがいかに ‘conventional’ なものに見えようとも、その ‘Grace’ への信頼であり、それにもとづくダンカンの秩序であり、更にそれに従属する様々な ‘moral values’ であり、‘moral sense’ である。そしてその価値観の転倒にいたるマクベス夫妻の心理の経過は夫々ちがったものではあるが、とにかく彼等は ‘courage’, 別な言葉で ‘valour’ というものを最高の価値、ほとんど一つの最高の belief の表明でもあるかのように考えることで、実は自らのうちに権力への欲情 (lust for power) をかきたて、それが悪であるとは知りながらも王を殺し、遂には暴力と破壊へ、ひいては自己破壊へのめり込んでいく不毛で fallacious な願望を代表している。

マクベス夫人についてふれておこう。夫人がマクベスとちがって心理的に一挙に悪にコミットし、悪の ‘spirits’ を ‘invoke’ するのを、彼女がマクベスに比べて良心的でないとか、想像力が不足しているからだというようなコメントには大して意味があると思えない。夫人にそういう心理的経過が可能なのは、彼女があくまでマクベスに対して、外的社会的には勿論のこと内面的にも、一見さう見えるのとは反対に、まさしく従属的な status にいるからであり、彼女はマクベスの中に、あるいはマクベスを通してつくり上げた fallacious な ‘manhood’ の幻影をいただくことによって、すでに自己を欺瞞しているからである。それは丁度キャシアスがブルータスを通してしかシーザー暗殺の成功を夢みることができないのとほぼ同断であるが、ただ、マクベス夫妻の場合、ブルータスーキャシアスとちがって、当然そこに性的要因が働いていて、シェイクスピアはそれをかなり抑制しているが、その代りにバンクオーの子孫とかマクダフの子供とか、その他子供のイメージに拡大し、その夫婦のテーマを構造的に作品全体に結びつけるのに成功しているといった工合なのである。

マクベス夫人の愛情は、当時の伝統的保守的立場から見たら明らかに、その動機においてすでに ‘永遠なるものの恩寵’ を喪失した miserable な、その底に挫折感をひめた ‘lust’

と取ったり殺しの場面のマクベスの恐怖やバンクオーの幽霊のことでは軽蔑したような口調でたしなめたりする夫人のあの直線的な論理に非常に近い推論の結果であるからだ。私見では、「殺すな」とはっていないということは、後述するようにマクベスの自意識の屈折がある段階に達したとき有効に作用する論理の一モウメントではあるのだが、しかし魔女のことで夫人のように直線的な論理のコースに乗り得ないところに、マクベスの意識の相剋なり複雑さ (complexity) なりがあって、それがまた、ほとんど劇全体の、特にバンクオー殺しの後の魔女との再会シーンあたりまでの劇の実質をなしていることは、明白なことに思えるから。ちなみに、魔女との再会以後は、マクベスは一段と‘作為の信念’ (make-believe) の中を突走り、——あの絶妙のプロット、バーナムの森と女から生れなかったもの云々というそれ自身でも一種 metaphysical な詩的劇的效果を持ったプロットに乗せられて破滅していく。

第二の点は、先にブラッドレイの ‘something in him’ を引用したことからすでにおわかりだと思うが、私が「マクベス」解釈において取りつつある立場は、コオルリッジ、ブラッドレイ、それから、(D・ウイilsonの「マクベス」論を批判したときの) W・エンプソン (William Empson)¹²⁾ の線上にあるということである。そして、それはかなり多くの「マクベス」論が、少なくともマクベスの野心や殺意の発生の時期などの問題で、これまた暗々裡に前提としている立場のようでもあるから、私は今それを自覚的に取り上げ、私見を混じえて要約しておきたい。それはほぼ次のようになる。

マクベスは魔女に会う前に (というのはこの劇の戦場に出かけるより前にといった方がよい) すでに野心をいだいていたばかりか、王殺しのことも念頭に浮んだことがあり、とくに夫人に打ちあけて以来、マクベスにとって、最大の内面的問題は、いかにして自らの ‘conscience’ (あるいは ‘consciousness’)¹³⁾ の眼をかすめて王殺しに踏み切るかということであった。したがって、そのことが、エンプソンの言葉をかりれば、少なくとも ‘guilty daydreams’ のごとく意識の底の方にまといついていた、と。

こういう前提に対して、それは劇の登場人物を劇の外に連れだすものであるという非難があるかも知れないが、それはあたらない。そういう非難は、演劇の時間、少なくとも主人公の *in absentia* の時期に関するある種の無理解から生ずる非難であるように私には思われる。¹⁴⁾ (後注参照) もっとも「マクベス」の場合、エンプソンもいうように、そういうことを観客に知らせるのが少々遅すぎた (belated)¹⁵⁾ 感はある。しかしそれでも、そのこと (つまり夫人に打ちあけていたことなど) が夫人によってマクベスをダンカン殺害の方へ一押しする最後の決定的な契機として使われている (I. vii) のを見逃すわけにはいかないのである。

IV

ところでエンプソンは、この劇の冒頭における魔女の有名な ‘fair is foul; foul is fair’ にすでに暗示されていて、あとでマクベス夫妻の心中に生ずる道徳的価値の転倒 (moral

か、マクベスは王を殺すであろうとかはいいない。つまりコーダーに事実なったことは、グラームス (Glamis) になっている事実と合せて魔女の‘予言’の前半があたったのであるが、そして予言の前半があたったから後半もあたるであろうと感ずるのが、仮りによくある人情の自然だとしても、そのために現在の王ダンカン (Duncan) を殺さねばならぬと思うのは明らかに飛躍である⁸⁾。この飛躍は何故か、あるいはいかにしてか。

ほとんどの「マクベス」論はこの問題を近くにあるいは遠くにおいて展開されているといっても過言ではない。丁度、シェイクスピアの他の劇においても、しばしば、その登場人物達の動機のせんさくが不可能、あるいは少なくとも非常に困難な場合があるように、この場合もその何故かに答えるのが不可能であるという立場、また、私が今先不満を述べた L. C. ナイツのように‘詩’としての反応を強調する立場、あるいは魔女の‘神秘性’を歴史的時代的考証によって裏づけようとする立場等々、それらのほとんどが、結局は暗々裡にこの問いを前提にしているといっているのである。従って、ここでもう一度私のやろうとしていることを繰り返し、敷衍しておけば、A. C. ブラッドレイのよく引用される、(イタリック筆者)

The words of the Witches are fatal to the hero only because there is *something in him* which leaps into light at the sound of them.⁹⁾

あるいは「マクベスは自分で自分を誘惑したといわねばならぬ。」¹⁰⁾などの文章のその‘something’を確認し、更に、‘自己誘惑’の心理、私の用いたい言葉でいいなおせば、‘自己欺瞞’¹¹⁾ (self-deception; mauvaise-foi; make oneself believe—作為的に信じようとする) の意識を検討する、一口でいえば、‘something in him’のその something の飛び出し方を、あの‘aside’に即して考えてみるということになるであろう。

III

ここで是非考慮に入れておかねばならぬことが二つある。一つは魔女の言葉に関して、その意味を形式論理的に規定した場合、勿論上述のように、魔女は、「殺せ」とはいいないが、同時にまた、「殺すな」ともいいない点である。したがって直ちに次のように(必ずしも間違っていないが) やや単純に推論する人があるかも知れないということである。

つまり、マクベスは魔女に会う前にすでに野心を、いや何程かの殺意さえもいただいていた。そして魔女の言葉から、王になることはほとんど確実であるように思われた。しかも魔女は「殺すな」とはいいない。したがって王殺しを実行しても、つまり、‘nearest way’ (I. iv) を取っても失敗はあり得ないであろうとマクベスは思った。しかしそれでもやはり、王殺しというのは思っただけでぞっとするようなところがあり、マクベスは恐怖にゆすぶられる。何しろマクベスは‘想像に弱い’云々……と。

この動機づけが単純に過ぎるというのは、それが、マクベスの手紙を読んで、魔女のことで直ちに、‘fate and metaphysical aid doth seem to have thee [Macbeth] crowned’

々それにこだわって問題の所在を明確にしたい。周知のようにナイツは、それまでのシェイクスピア批評がいわゆる ‘character-response’ に傾きすぎるのを批判する形で仕事を始めた人である。だからこのマクベスの ‘aside’ の場合でも、我々がそれを何よりも先ず ‘詩’ として取りあつかい、それに対して ‘詩’ として反応することをすすめているのである。そして、結局、方法論的には、例えば K・ミュア (Kenneth Muir) のように、‘性格に詩が属しているというよりもむしろ詩に性格が属している’³⁾ というようなことがいいたいのであろうと思われる。(私はそういう主張には、その限りにおいて別に不賛成ではない。) ただ、私に不満なのは、ナイツが詩とはいっても当然具体的な ‘specific’ な関係の中でとらえねばならぬと強調しながら、しかも、この ‘aside’ を説明し、劇全体 (the play as a whole) と関連させるのに、彼の論文では、肝心のマクベスの ‘state of mind’ がはっきり浮び上ってこない点である。ナイツのこのくだりの説明は、マクベスの心の動きに関しては、「‘cannot be ill, cannot be good’ は ‘sickening seesaw rhythm’ が ‘a phantasma or a hideous dream’ の印象を完全にする。」⁴⁾ とか、‘whose murder yet is but fantastical’ のあたりは「思考がまさしくその形成の過程においてあかされている。」⁵⁾ といった程度のことである。(ことわっておくが、前者は人がそう感ずることができるものであり、後者は勿論いわれている限りにおいては間違っていない。) ナイツは他の箇所でのマクベスの心理を説明するのに ‘betrayal of life to automatism’ とか ‘automatism of evil’ とかいう言葉をつかい、終りの方で結論的に、‘Macbeth has betrayed himself to the equivocal....’⁶⁾ と書いて、‘betrayed himself’ をイタリックにしている。こういう ‘悪の automatism’ とか ‘betrayed himself’ とかいう観念の内容は私にとって極めて重要なものであるが、ナイツがこの 1 幕 3 場の ‘aside’ を、それが劇全体をすでに指示する程重要なものと考えるのであれば、それこそ、そういう観念の内容を、まさしくその ‘思考の形成過程’ であるこの ‘aside’ に即して分析し把握する必要があったのではないか。

私の試みは、マクベスのそういう心理なり意識の動きを、この ‘aside’ 全体にみられる一種独特な、いい得るなら ‘fantastic で同時に rational’ な傾向や、また、その言葉一特に先の引用で私がイタリックにしているところ—の意味、ロジックなどに即して分析すること。更に、別言すれば、つとに A. C. ブラッドレイが、マクベスの意志と魔女との関係について、「ひとたびその内的関係 (inner connection) が会得 (realize) されたら云々……」⁷⁾ と暗示したその内的関係——古典的な「自由意志」と「運命」という概念の二分法だけでは到底うまくつかめそうにもない——その関係を、あえて、(というのは、この際魔女に対する歴史的時代的な考察などを抜きにして) マクベスの意識の側から会得しようとするということでもある。

II

先ず冒頭に引用している ‘aside’ の前後、つまり 1 幕 3 場のコンテキストから魔女の言葉に対するマクベスの反応に関して、問題をやや形式論理的に整理してみよう。魔女はマクベスがコーダー (Cawdor) の領主になるといい、更に王になるといったが、王を殺せと

‘Nothing Is But What Is Not’

—*Macbeth* 論のための覚書—

瓜 生 善 美

I

「マクベス」の中で私にとって一番わかりにくいのは、そしてある意味で最も重要だと思われるのは、1幕3場の、魔女の言葉に対するマクベスの反応の仕方、特にその終りの方のかなり長い ‘aside’ (下に引用する) における彼の心理、あるいは意識の様態である。

Macbeth (aside) Two truths are told,
As happy prologues to the swelling act
Of the imperial theme. —I thank you, gentlemen.
(aside) *This supernatural soliciting*
Cannot be ill, cannot be good. If ill,
Why hath it given me earnest of success
Commencing in a truth? I am Thane of Cawdor.
If good, why do I yield to that suggestion
Whose horrid image doth unfix my hair,
And make my seated heart knock at my ribs
Against the use of nature? Present fears
Are less than horrible imaginings.
My thought, whose murder yet is but fantastical,
Shakes so my single state of man
That function is smothered in surmise,
And nothing is but what is not.

しかも、ウイルソン・ナイト (Wilson Knight) によれば、この ‘aside’ の最後の言葉 ‘nothing is but what is not’ はこの劇の ‘text’ とよんでよいものであり¹⁾、また例えば、L. C. ナイツ (L. C. Knights) によれば、この ‘aside’ には単に主人公マクベスの ‘state of mind’ ばかりでなくてこの劇全体のテーマを指示する観念がすでにいくつか語られているのである²⁾。結論的には私もそんなふうについてよいであろうという気はしているのだが、何しろ W. ナイトの説明には直観的には鋭いところはあっても、その措辞は論理的にまことに飛躍の多いものであり、また、L. C. ナイツの方は何かきまじめでかたくなしく、少なくともこの ‘aside’ の取りあつかいは、悪い意味でやや観念的形式主義的である。ナイツの「マクベス」論は彼の論文の中でも力作にはいるものであろうから、以下少